

---

# うた姫

果物蜜柑

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

うた姫

### 【Nコード】

N1882Z

### 【作者名】

果物蜜柑

### 【あらすじ】

ノーマル  
普通ではないものが見える少女、ミコト。

ある日その秘密がばれ、クラス全員から襲われてしまう。

唯一のとも（生き物ではない）ソレに助けを求めると、ソレの言った言葉は・・・。

## 異変

夢を見た。

綺麗な女の人がいた。

何故かわからないけど、その人は、焦っていた。

はやく、はやく、はやく………。

「!? はあ、はあ……。」

また、いつもの夢か。なんだかこのごろ見る回数が増えている。誰かに相談したいけど、そんな友人なんて、私にはいない。

どうせまた、馬鹿にされるか、裏切られるか……。

そこまで考えると、今まで封じ込めていた思いが湧き出てきた。

「くるなバケモノ!! あっちに行け!!」

たくさんの人々から浴びせられた言葉。

今まで何度も引越した原因。

だからこそ、ここでは静かにすごしていたい。

私はミコト。今はロンドンに住んでいる。ミコトって名前でも、れつきとしたイギリス人。純粋<sup>ビュア</sup>じゃないけど。

別に、純粹じゃないからって、バケモノって言われていたわけじゃない。

私は……。

物心ついたときから普通<sup>ノーマル</sup>じゃないものが見えていた。はじめはみんなが見えていると思ったから、普通に話題に出していただけ。

みんなが見えないんだって気がついたときには、もう、遅かった……。

「どうしたの？ミコト。元気ない。」

私に話しかけるのは薄緑色の謎のモノ。半透明だから生物じゃないのはわかるけど、自分からは、何も話してくれないから、よくわからない。

「なんでもないから。」

私は微笑んで言った。

「ありがとう、ソレ。」

ソレは薄緑色の身体で、くるっと一回転して見せた。

「そう？ならいいや！！」

ソレは子供のようにかわいらしく笑っていった。

「・・・心配してくれたの？」

「うん！！友達でしょ？」

「・・・うん。」

私は心の底から笑った。

友達。その言葉が胸の中で響き渡った。生き物から言われたわけじゃない分、少し複雑だ。

でも嬉しい。とても。

だからソレがあんなことになるなんて、思いもしなかったんだ。

「ねえ？あんた、変なものが見えるんだってえ？」

私に話しかけてきたのはいつもクラスを仕切っている子だ。

ここは高校の教室の1-D。私は普通に本を読んでいた。

「え・・・？」

いきなり言われて私の頭は思考回路不能した。<sup>フリーズ</sup>

その子はいきなり私の黒髪をひっぱった。

「痛い！！やめてよ！！」

私が叫ぶと、その子が私の顔を殴る。

「うるせー！！大体、お前生意気なんだよ！！ちよつとみんなもこいつ懲らしめましょうよ。」

周りの人たちがいつせいに殴ってきた。

「お願い！！やめてください！！」

ゴスつと誰かの蹴りが、みぞおちに入って声すら出せなくなる。

「・・・・・・・・っ」

「やめてよ、じゃないでしょう？私みたいなバケモノを殺してくださいだ、と思うなあ。」

彼女は歌うように言うと、一転して低い声で言った。

「死ね。バケモノ。」

おかしい。

殴られて朦朧とした意識の中で思った。

何で・・・・、何で、みんなこんなに興奮してるの・・・・？

私は必死に教室から逃げ出した。

みんなが追ってくる前にトイレに逃げ込んだ。

「・・・・っ、ハア、ハアっ」

ドアに寄りかかり肩で息をする。

ガツンとドアが何かでたたかれた。

「助けて。」

私は懸命に祈る。

「お願い。誰か助けて。」

すると、ポンつとソレが現れた。

「ソレ・・・・・・・・。」

「殺してほしい？」

その可愛い身体からは予想もできない言葉がでてきた。

「え・・・・・・・・？」

「悩んでる暇なんてあるの？」

ない。恐らく私はドアが破壊された後、何かに取り付かれたような様子のみんなに殺されてしまう。

そのとき、私の顔の真横から何か棒のようなものが突き出してきた。

「ひっ・・・・・・・・！！」

いくつもの足音が教室のほうに向かっていった。たぶんもっと強力な武器を取りに行ったんだろう。

もう、時間がない。

そして、私の覚悟は決まった。

「お願い。あいつらを、殺して」

## 異変（後書き）

初めての投稿です。よろしくお願いします。

いやあ、なんだか緊張するなあ。

ミコトちゃん、なんだか危ないことになりそう・・・。

あ、ミコトちゃんのフルネームはミコト・ハミルトン。

まあ、あまりフルネームででないと思います。はい。

これからもどうぞよろしく。

## 黒髪の救世主

私が言うと、ソレがにっとなつた。

「いいよ。その前に君の血を一滴ちょうだい。」

ソレがあーん、と口をあけるので私は先ほど怪我したところからソレに血を吸わせた。

「ふふ。ふはははははは！！」

ソレの身体がいきなり巨大化して凶悪な姿となる。

「え・・・・・・・・・・。何なの、それ・・・・・・・・・・。」

ソレは私の問いには答えずに、トイレから飛び出した。

あわてて私もソレのあとを追いかけた。

突如として教室は阿鼻叫喚の地獄絵図となつた。

ソレの身体はまるで悪魔だった。鋭い爪でクラスメートの体をひつかく。

ソレの動きと共に教室が血に染まる。

ソレの姿が見えない子たちは何が起こっているかわからないだろう。

「ねえ、もう止めて！！みんな死んじゃう！！」

私が叫ぶとソレがニヤリ、と笑つた。今まで見たこともない恐ろしい顔だった。

「何を言っている？こいつらを殺してくれって言つたのは同じだろう？」

その言葉を聴いて、私ははっと気が付いた。

そうだ、これを望んだのは私自身。こうなっても、私にはソレを責める事ができない。

それどころか、裁かれなければいけないのは、私。

そのとき私の顔の横を何かが通り過ぎた。

それと同時に声がする。

「天の使いよ、我が命に従え。契約により我が僕しもべとなり我の力となれ・・・・裁きの天使よ。」



いきなりソレが動きを止めた。いや、止めたんじゃない。動けなくなっただ。

ソレの視線の先になにか天使のようなものがいた。

「あれは・・・天使？」  
エンジェル

すると先ほどの声が答えた。

「・・・。あれが、見えるのか？」

微かに驚いた声で、言った。

「・・・まあいい。説明は後にする。確かにあれは、お前たちの言う天使だ。あれは裁きの天使。天の使いの中で最も残酷で血を好む。・・・悪魔よりも。」

ざっと私の横で足音がした。私は震える体でそつとその人の顔を見た。

とても長い黒髪。私よりも綺麗な髪。

あまりに長い黒髪なのではじめは女かと思った。

だが声は、男の声だった。

「なぜ、ここに悪魔がいる。しかも、あまりに強い。だが・・・。」

彼は笑う。静かに笑う。

「私が、何とかする。安心しろ。」

その笑みは、強さからくるのか・・・。

私の強張った心にゆっくり入ってくる、その強さ。

「あ・・・、」

私の思いは言葉にならない。

私は思う。

彼は、救世主だと。この黒髪の彼は・・・。

私の非日常から、救い出してくれる、救世主に違いない、と・・・。

## 黒髪の救世主（後書き）

やばいですね、なんか、悪魔&天使来ちゃいましたねえ・・・。  
黒髪の彼・・・誰なんだろうね・・・。

## 勝利

彼は私の前に立った。

「私の後ろに居ろ。安全だから。」

「あ、安全・・・・・・？」

彼はそれ以上私にかまわず、天使に向き直った。

それから、なにやらほかの国の言葉らしきもので天使に告げた。

「。。。。。」

その瞬間天使が飛び立った。体重を感じさせない動きだった。

ひゅつと空を切る音がしたと思うと、次の瞬間にはソレの身体から緑色の血が噴水のようにふきだす。

その血が触れたところは、塩酸が触れたようにじゅうつと音を立てて溶けていった。

あまりの惨劇に目の前が暗くなる。

ふと天井を見ると私に向かって血が雨のように降り注ぐとしていた。

「・・・・・・・・！！」

恐怖で身体が動かない。

そのとき誰かが私を突き飛ばした。

直後、じゅうつと言うおとがした。

はっとなって私はその人を見た。

「ひどい火傷。」

しかし彼は表情を変えずただ、静かな目で、ソレを見た。  
が、いきなり表情を変えると私を見た。

いや、正確には、私の後ろを。

恐る恐る後ろを振り向く。

そこにはもう一匹、悪魔がいた。

激しい殺気を全身にまとうて。明らかな憎悪を隠そうともせず。  
そこに、いた。

「ジャマヲスルナ。ニンゲンゴトキガ、ワレワレノジャマヲ……！」  
口を開け、襲い掛かって、

こなかった。

悪魔は、そのままがくりと膝をつくとそのまま倒れた。

巨大な身体の後ろから出てきたのは先ほどの天使だった。

愛らしい姿にはとても似合わないたくさんの返り血をかぶって。

それをとて幸福だと言いたげな顔をして。

もはや悲鳴を出せるほどの体力もなくなった私は、ぼんやりとそれを見つめていた。

ふと周りを見渡すと、あれほどいた生徒たちが一人もないのに気が付いた。

そのとき彼がポツリと何かをつぶやいた。

とたん、天使の姿が消えた。

それですべて、終わりだった。

あれほどの騒ぎがあったのに、なぜ、誰一人集まってこないのだろう。

ソレの姿を見ながら考えた。

突如、ソレの身体がピクリと動いた。

そしてさけぶ。

「ミコト、お前は私たちのものだ……！小僧、俺を倒しても、意味がない……！」

ひやはは、という狂った笑い声を残して、ソレの姿は跡形もなく消え去った。

ガクツと黒髪の彼は膝を付いた。

あわてて駆け寄ると、彼の額には大粒の汗が滲んでいた。

呼吸も荒い。

「・・・っ！！大丈夫ですか！？」

彼は返事をする余裕もないらしい。

「今すぐ人を・・・」

急いで立ち上がろうとした私の腕を彼がつかむ。

「人は・・・呼ぶな。」

息も絶え絶えにつぶやいた彼の身体は異常なくらい熱かった。

「わ・・・解り、ました。」

そつと彼の腕を見ると、火傷がひどくなっていた。

「今、薬を持ってきました。だから、動かないで。」

そういつて私は、教室から飛び出した。

## 勝利（後書き）

わ〜〜い！！『救世主』の勝利ですね！！

・・・でも、悪魔たちが私の頭の中で好き勝手なセリフ言っんで、  
今夜は寝れなさそう・・・。（泣）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1882z/>

---

うた姫

2011年12月28日20時51分発行